no.37

CLCからしだね書店便り

January 2024 1

＊今月のご案内＊

① 新連載
「子どもと大人のためのこころの対話
―信仰と哲学」

② 能登地震の被災地支援に行って
社会福祉法人ミッションからしだね職員
武山　世里子・鍋島　愛信

③ 読書感想本『いのちの初夜』

ＣＬＣからしだね書店では…

1. キリスト教書だけでなく、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
2. お洒落 でかわいい雑貨や小物もあります。
3. ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
4. コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
5. 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、お好きな本を手に取ってお読みください。
6. 古書のコーナーもあります。ほりだしものあります。
7. 読書会や著者を招いての講演会など、人と人とが出会い、つながる「対話」の場を提供します。

CLCからしだね書店＆カフェ トライアングル
営業時間　11:00~17:00
定 休 日　日曜日と年末年始（※祝日も営業）
毎月第３木曜日は書店のみ営業

子どもと大人のためのこころの対話
―信仰と哲学

連載第1回

坂岡 大路

ここは京都の片隅にある隠れ家的なカフェ。厳しい寒さが続くある日、カラシちゃんとタネオくんの二人は、暖を求めて店に入りました。

マスター：おお、久しぶりのお客さん！哲学カフェ「べれや」にようこそ！

カラシちゃん：うっ、私たち以外だれもいない…。

タネオくん：え？哲学カフェってどういうこと？普通のカフェじゃないの？

マスター：ここは哲学を楽しむことができるカフェ。その名も哲学カフェ「べれや」です！

カラシちゃん：なんだか変なところに来ちゃったなあ。帰ろっか。

マスター：ちょっと待ってください！せっかく来たのも何かの縁。外は寒いですし、せめてコーヒーだけでも飲んでいきませんか？

タネオくん：まあ、ちょっとだけならいいか。

（二人がコーヒーを飲みながら……）

カラシちゃん：哲学カフェ、というだけあって哲学の本がいっぱい置いてあるね。

マスター：そうなんです！（身を乗り出しつつ）

カラシちゃん：うわあ！びっくりした！

マスター：これからの時代を生きる私たちにとって、「哲学」を学ぶことがとても大事になっていく。これが私の考えなんです。

カラシちゃん：「テツガク」かあ……。なんだかむずかしそう。もっと役に立つ勉強がいろいろあるんじゃないの？

マスター：むずかしそう。役に立たなさそう。そんな感じの印象だね。タネオくんはどう思う？

タネオくん：うーん、ぼくはクリスチャンなんですが、それって結局人間が考え出した思想だよね。だとしたら信仰のじゃまになるんじゃないのかな？神様をないがしろにして、自分の頭で考えたことが中心になっちゃう……みたいな。

マスター：つまり自己中心的になっちゃう、みたいなイメージがあるってことか。

タネオくん：ちがうんですか？

マスター：哲学（philosophy）の起源である古代ギリシャに遡ってみましょう。商業の盛んな交易地であったギリシャに、様々な国や地域から、異質で多様な人々が大勢やってきた。どうなったと思う？

カラシちゃん：意見とか考え方の違いが出てきそうだね。

マスター：その通り。それまでの同質的なコミュニティの考え方では通用しなくなった。A人が「A神こそ正しい」と言うと、B人は「いいや、B教の教えこそが正しい」と言う。

タネオくん：それだと社会が成り立たないね。

マスター：共通のルールとか、普遍的な善悪の判断基準が成り立たない。一体、どの考えが正しいのだろうか？いや、そもそも、私たちは何をもって「正しい」と判断しているのだろうか？みんなが納得できる「よい生き方」の根拠はどこにあるのだろうか？みんなこんな疑問を持つようになったんだ。こうして、普遍的に通用する考え方の根拠を求めて、人びとは対話するようになったというわけ。（西研『集中講義これが哲学！』参照。）

カラシちゃん：へえ、そんな背景があったんだ。自己中心と言うよりも、むしろ考え方の違う相手にもなるべく開かれた考え方を創ろう、っていう態度に見えるね。

タネオくん：なんだか、今の時代にちょっと似ているような気がする。

マスター：ほう、どんなところが似ていると思ったんだい？

タネオくん：だって、グローバル化とかオンライン化って言われてるよね。在留外国人のこととか、難民や移民の問題のこととか、ニュースでやってるよ。

カラシちゃん：国のことだけじゃなくて、障害、病気、宗教、価値観、性別、人種もバラバラな人たちが、この日本に住んでいるよね。

マスター：哲学がさらに求められるようになったのは近代の時代なんだ。当時、世界の人々を苦しめていたのは戦争と内乱。中でも一番ひどかったと言われているのは何だと思う？

タネオくん：戦争ってだけでもひどいのに、その中でも特にひどいもの？

マスター：それは宗教間の対立なんだ。「やつらは悪魔の勢力だ。偶像崇拝者だ。」「神の敵は滅ぼされねばならない。」これが宗教戦争の考え方。なにせ相手は「人の皮を被った獣」だから、どんな残酷な目に合わせても良心が痛まない、ということになる。（ピンカー『暴力の人類史』参照。）

タネオくん：こわすぎる……！

マスター：宗教戦争は「神の敵」を滅ぼし尽くすまで終結する条件を持てない。だから、宗教とは別の原理が必要になった。それが「互いの自由を認め合い、尊重し合う」という原理。「ぼくたちは確かに違う宗教を信じている。だけど、せめて戦争と暴力はやめましょう。そのために互いの信教の自由を承認し合いましょう。ここだけは最低限合意できますよね」と。この「相互承認」の原理に至るまで、彼らが戦争を終えることはなかったんだ。

カラシちゃん：それって、「民主主義」とか「人権」みたいなこと？

マスター：近代哲学者が辿り着いた「自由を認め合って生きる」という原理は、重い犠牲を伴ったけど、やがて「民主主義」という体制に結実することになる。

タネオくん：うーん、なんだかマスターの言うことを聞いていると、「キリスト教はいらない」「哲学だけが問題を解決できる」って言っているように聞こえてしまうなあ。

（つづく）

～作者よりひとこと～

はじめまして。この物語の作者の坂岡大路と申します。精神科で臨床心理士をしつつ、哲学対話を主宰したり、実践的な哲学の研究をしている者です。

それにしてもなぜ今、哲学なのでしょうか？私たちはしばしば、自分だけの狭い視野に囚われた考え方に陥ってしまいます。また、自分と同じ価値観を持つ集団や、グループの規範に視野を固定され、そこに納まりきらない他者の想いを、まるで「ないもの」のように扱ってしまいます。しかし、これでは聖書の言う隣人愛と真逆の方向に進んでしまうのではないか、と私は危惧します。聖書に出てくる「善きサマリヤ人」のたとえ話では、強盗に襲われ、負傷した人を、宗教的規範ゆえに無視して通り過ぎる祭司が登場します。自分の隣に生きる他者がどのようなことを想い、感じ、考えているのか。ここを無視せず、尊重するところからしか「愛」は始まらないのではないでしょうか。それとも私たちは、「他者の存在を無視して通り過ぎる」祭司の生き方を選ぶのでしょうか。

哲学は私たちの思考を柔軟に、自由にします。そして、狭い視野や思い込みに閉ざされた状態から他者との対話に開かれた自由な信仰へと解き放ってくれるのです。大げさに構えることはありません。何気ない日常の中に、すでに哲学の種は潜んでいます。「なんで？」「気になる」「もやもやする」……哲学は、そんなふとした引っかかりから始まります。

違和感や疑問を言葉にしてみる。人に聞いてもらう。そのことを通じて、私たちは世界とつながっていける。そのような哲学の魅力が、少しでも皆様に伝われば嬉しいと思います。

さかおか　おおじ
１９８８年京都市生まれ。北海道大学大学院教育学院臨床心理学講座修士課程修了。札幌市内の児童精神科で臨床心理士として勤務。本質学研究会、哲学プラクティス学会、宗教倫理学会、キリスト教教育学会等の学術誌に論文掲載。札幌市若者支援施設Youth+（ユースプラス）でワカモノ哲学カフェを主宰するなど、オンラインや地域で子ども・若者と共に哲学対話を行う活動に取り組む。

読書感想文

死へ向かう旅人としての人間

『いのちの初夜』定本　北條民雄全集より
（北條民雄　東京創元社　２，２００円［本体２，０００円＋税］）

今回紹介する小説『いのちの初夜』の著者である北條民雄（１９１４～１９３７）は19歳でハンセン病の診断を受け、ハンセン病療養所である全生病院（国立療養所多摩全生園の前身）に入所し、23歳で結核により亡くなりました。『定本北條民雄全集上』（創元ライブラリ。以下引用は本書による）の年譜によると、処女作「間木老人」が「文學界」に発表されたのが１９３５年10月、死去したのが37年12月なので、作家として活動したのはわずか2年ほどです。

「いのちの初夜」は、主人公の尾田高雄がハンセン病の療養所に入所する最初の一日を描いた作品です。尾田は半年前にハンセン病の診断を受け、2日前に療養所への入所が決まったばかりで、気持ちの整理をつけられないまま、とにかく療養所へと向かいます。

当時、ハンセン病は有効な治療法が確立されておらず、患者は療養所に隔離されて社会とのつながりを断たれ、死ぬまでそこで暮らすことになっていました（※）。尾田はその事実を受け入れかねて、自分が死ぬ姿を想像したり、実際に自死を試みますが、どうしても死にきれません。自死できなかった尾田は、「死というものは、俺には与えられていないのか」と途方に暮れます。　かといって、かいま見た療養所での患者たちの壮絶な生活を思い出すと、療養所に戻る気にもなれません。それで尾田は、病棟とそれを囲む垣根の間を行ったり来たりし、何度も「踵を返し」ては立ち止まり、自分がどこへ向かうべきかを決められないでいます。

そんな時に現れたのが、先輩患者である佐柄木（さえき）でした。佐柄木は5年間この療養所で暮らしており、重症の患者を軽症の患者が介助する「附添さん」の役を淡々とこなしています。病気や療養所での生活、そして自分の運命を完全に受け入れている

ように見える佐柄木に、「兎に角、もう遅いですから、病室へ帰りましょう」と諭され、尾田は「何となく安心して」彼に従い、病棟へと戻ることになります。彼らは共に社会から隔絶した療養所の中で病気を悪化させて死んでいくしかないという運命を共有しています。だからこそ尾田は、佐柄木に未来の自分を見、同じ道の先を歩く人として安心して従うことができたのです。

はじめ尾田の目には達観しているかに見えた佐柄木ですが、彼もまた自分の体が着実に病気に蝕まれていく現実と折り合いをつけるために密かな戦いを続けていました。佐柄木は片目が義眼で、もう片方の目も見えなくなりつつあります。まもなく見えなくなるという恐怖と戦いながら、彼は療養所で重症の患者を見つめて学び取った「癩者としての生活」を文学の形で遺すため、小説を書いているのでした。

佐柄木はある患者を指差して、尾田に尋ねます。「尾田さん、あなたは、あの人達を人間だと思いますか」。その患者は全身を包帯に巻かれ、ベッドに端座し、病気により空いた喉の穴から息を漏らしながら、「南無阿弥陀仏」と唱えつつただ死を待っているのでした。「ね尾田さん。あの人達は、もう人間じゃあないんですよ」。佐柄木は言います。「人間ではありませんよ。生命です。生命そのもの、いのちそのものなんです」（傍点原文）。

佐柄木は、全ての希望を剥ぎ取られた悲惨そのものの重症ハンセン病患者たちの生活から、それでもなお残るものとして人間の生命力を見て取り、そこに「生命そのもの」を見出しました。それは絶望と裏返しの希望です。佐柄木はこの新しい人間観を、文学という形で定着させようと願ったのでした。これは作者である北條の願いでもあったでしょう。

達観した佐柄木ではなく、病を受け入れて生きるために今なお格闘しつつ歩む佐柄木の姿に、尾田は限りない共感を覚え、佐柄木を夜明けの散歩に誘います。冷たい外気に触れながら、力強く歩く佐柄木を見て、尾田もまた生き続ける決意をするところで小説は幕を閉じます。

文庫本で40ページほどの短い小説ですが、読後に深い感動が読者の心に残ります。それは、読者もまた死へと向かう旅路を佐柄木や尾田と共有していることに気づくからです。尾田や佐柄木に限らず、人は皆死へと向かって進みます。彼らの場合は、社会から切り離された療養所という環境で、着実に進む自身の身体的な崩壊の過程を直視せざるを得ないという極端な状況に置かれてはいますが、全ての人間の生もまた彼らのそれと本質的には変わらないはずです。この小説が読者の胸を打つのは、「健康な」人間が普段忘れている、本当の生のあり方が、ハンセン病の療養所という特殊な環境における生として濃縮した形でそこに示されているからです。

死へと向かう孤独な道。病を通して、重症患者の介助を通して、それこそが人間の本来の生のあり方だと受け入れた佐柄木は、最後まで生きて書き続けることを選びます。その決意をどのように受け取るかは、読者それぞれの読みにかかっていますが、少なくともそれは揺るぎない希望ではありません。現に佐柄木も盲目になるという恐怖と戦いながら歩んでいます。彼もまた、彼の先を歩む重症ハンセン病患者の歩みから学びつつ、もがきながら進んでいる旅人なのです。

全集を編纂した川端康成によると、北條自身によって破棄された作品の中に、『いのちの初夜』に一度び獲た生命観を更に深く懐疑否定し、その彼方に光明を捜ろうとするもの」（「上巻編纂の辞」より）があったと言います。北條もまた、「いのちの初夜」を書いたことで達観したのではなく、死を見つめながら歩み続けるための格闘を続けていたのでしょう。

ですから、「いのちの初夜」が与える深い感動は、実は、そこで表現されている生命観や希望といった北條の思想からではなく、むしろ確実にやってくる死を見つめつつ、それでも「いのちとは何か」「生きる希望とは何か」を問い、模索し続ける北條のあがきそのものから来ます。23歳で死んだ北條は、死へ向かう旅人の先輩としての歩みを、同じく死へ向かう旅人である私たち全ての人間に、文学作品を通して遺してくれたのです。

※ハンセン病を引き起こす「らい菌」は、感染力が弱く、うつりにくい病気です。また、現在の日本の衛生状態では感染しても発症することはほぼありません。しかし当時はハンセン病の有効な治療法が確立されておらず、「恐ろしい伝染病」という偏見があったため、患者は強制隔離され、差別の対象とされていました。1907年に成立した「癩予防ニ関スル件」という法律によって始まったハンセン病患者の隔離政策は、1996年に「らい予防法」が廃止されるまで続きました。その後、「らい予防法違憲国家賠償請求訴訟」や、「ハンセン病家族国家賠償請求訴訟」において、「らい予防法」による患者とその家族への人権侵害や国の責任を認める判決がでました。現在は薬によって治すことができる病気となり、日本国内での新規患者は年に数人程度です。

【書店員　凱】

能登地震の被災地支援に行って

ミッションからしだね　精神保健福祉士・相談支援専門員
武山 世里子
精神保健福祉士・社会福祉士
鍋島 愛信

2024年1月1日に発生した能登半島周辺での巨大地震を受けて、6日早朝から7日にかけて七尾市内の避難所のひとつである田鶴浜コミュニティーセンターに支援のためのニーズ調査（とりわけ福祉関係の）に行ってきました。ミッションからしだねと同じ山科にあり、日頃から協力関係にある介護老人保健施設（おおやけの里）役職員の方がつないでくださり、来て下さるなら是非お願いしますということで行きました。

私たちが訪れた避難所は田鶴浜コミュニティーセンターと近隣のもう1ヵ所だけですが、どちらも大変な中ではあるものの、運営スタッフも避難者の皆さんもお互いに理解、協力し合っておられ、穏やかな空気が感じられました。

一方で避難所を利用しにくいであろう障害のある方々の情報はなかなか得られず、福祉避難所の開設も進んでいない中で在宅避難されているのか？安否も含めて大変気になるところでした。

2日に渡る滞在で、見たこと、聞いたこと、感じたことなど少し書かせていただきます。

1．被災者が受ける痛み

私が避難所で出会ったある男性とのやりとりが頭から離れない。

被災した男性（Aさん）は、正月に帰省し戻れなくなった弟を、金沢駅まで車で送迎した。発災後5日間、避難所で過ごしている70代後半の父親も同乗させて、金沢市内の入浴施設に立ち寄ってから戻ることにした。Aさんは、その入浴施設のフロントの担当者に、被災したこと、ずっと風呂に入れなかったので、避難所に戻る前にゆっくりお風呂に入っていこうと思うことを話した。フロントの男性は、表情を変えずに「あ、そうですか」とだけ言って処理を済ませ、目線は次のお客さんに移していた。フロント担当者の表情や口調から、「ああ、ここは、普通にお正月なんだ」と感じ、複雑な気持ちになった。「少し離れただけで、これだけ違うんだ」と無性に悲しくなってしまった。

被災者は、愛する人や日常が奪われる中、そんな自分の状況とは無縁の人たちがいることを、避難所の外に出て体験する。（Aさんには、そのように映っただけで、実際にフロントの担当者が、地震のことを何とも思っていない訳ではなかったかもしれない。しかし、Aさんが「そのように感じた」ことは事実なのだ）

いいとか悪いとか、そんなことではなく、これも被災地の現実なんだと思う。

これから、この現実がもっとやってくる。

被災そのものの痛みと、自分の痛みとは無縁な人や社会の中にいる痛み。

この痛みにも、どうか押しつぶされないでほしい。

つらいけど、自分はしあわせになっていい、そんな風に時間をかけて思えるようになってほしい。

こんな思いを言葉にすることもできず、そっと被災地を後にした。

2. 避難所でいただく食事

七尾市の避難所に支援に入った。常時２００人以上、多い時には４００人にほどの被災者が避難していた。そこでは、24時間、誰かが常に動き回っていた。ひっきりなしに運ばれる物資の運搬や配布、食事の配膳、トイレなどの清掃、被災された方に交じって作業をしていた。

発災直後は物資が不足していたが、大型の避難所には物資が多量に運びこまれていた。その避難所においては、物資が不足しているという状態は比較的早期に解消されていた。

避難所にいる人たちには、外部の支援団体が食事を運んできた。配り終えると、「あなたも一緒に食べてください」と勧められた。外部から手伝いに来たものとしては、発災直後の被災地で食事をいただくことはできない、と、初めは固くお断りした。しかし、「そんな水臭いこと言わないで、一緒に食べよ」と再び勧められた。私は、「いえ、けっこうです」と差し出された器を突き返すことはできなかった。

先日、ある国会議員が能登地震の被災地に入り、現地でふるまわれた食事を食べたそうだ。それに対し「非常識だ」と批判を受けている報道を見た。

「あ、それ私のこと?」と思った。

繰り返しになるが、私はどうしても「私は被災者ではありませんので、被災地のものはいただきません!」と突き返すことができなかった。被災者の方からのあたたかな思いを突き返すように感じたからだ。

3. 被災地へ行くこと

被災地に外部から入るボランティアが負担をかけない、という原則は本当にその通りだと思う。

「緊急車両の通行の妨げにならないよう、外部から被災地に入って支援するのはやめてください」

「被災者の物資、被災者の利用する施設を外部の者が利用するなんて、一体何しに行っているんだ」

「テレビや新聞で状況は伝えられているんだから、それを見ていれば被災地のことがわかるはずだ」

報道から伝えられるそんな声が、自分の中ではとても大きく響いていた。

しかし、避難所で過ごすことで、被災者の厳しい現実を体験として知ることもある。

段ボールを敷いてその上に眠る床のかたさ、避難所に立ち込めるトイレの臭い、繰り返される余震、スマホから聞こえる地震や津波の警報…

それらはテレビ画面だけではなかなか想像のできない、被災者の毎日。

被災する人と寝食を共にするからこそ見えてくるものを「不要!!」と切り捨ててよいのか?

そんな厳しい被災地では、県外からの人や車が、危険を顧みず、行政の支援では届かない地域の避難所に物資を届けようと必死になっていた。

避難所では、外部の人が被災者と一緒に必死で避難所の運営を手伝っていた。

「負担をかけないように」と外部の支援を、被災地にいない人がＳＴＯＰさせることで、外部からの支援を上手に受けられる機会をどうか奪わないで、と思った。（武山）

書店に支援金箱を設置しています

2024年1月1日の能登地域地震　被災地　緊急燃料支援
（暖房や発電機・車両運搬用の燃料）
寄付金　会計報告
（2024年1月12日締め分）

収入	収入	支出	残高
ミッションからしだね　役・職員　13名	95,000		95,000
書店・カフェ募金箱（2024年1月1日～12日まで）	1,772		96,772
書店・カフェ募金箱（2023年度のお気持ち募金箱）	11,882		108,654
社会福祉法人ミッションからしだね地域貢献支出	91,346		200,000
NGOオペレーション・ブレッシング・ジャパンの緊急燃料支援窓口に送金（2024年1月13日）		200,000	0
合計	200,000	200,000	0

第一回目の被災地支援の寄付として、上記の通り、支援金を支出いたしました。

2024年1月13日　　坂詰　恵（会計担当）　　青田史子（確認）

古書献本のお願い

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただけるとありがたいです。（受付できないものもありますので事前にお知らせください。ご事情により当店より回収に行かせていただくこともあります。ご相談ください）

【献本をお願いしたい本の種類】

1　キリスト教書、キリスト教に関連した本（多少、書き込み等があっても、大丈夫です）
2　哲学、心理学等、人の生き方に関する本
3　社会の中で起きている問題を扱った本
4　暮らし（料理、健康、経済等）にかかわる本
5　小説（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）
6　漫画（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）

百科事典・辞書・開封済みのCD・DVD・月刊誌・週刊誌等は受け付けておりません

【本の送り先】

住所：〒607-8216　京都市山科区勧修寺東出町75 からしだね館
宛先：CLC からしだね書店　献本係　　電話：075-574-1001　FAX：075-574-0025
Mail：clc @ karashidane.or.jp

【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。

【献本感謝】

野崎様、荒垣様、杉浦孝夫様、木村絹子様、吉田功様、梅垣英子様、大津清一郎様、近藤宏様・栄恵様、樫田ひろみ様、髙橋 卿子様（順不同）

12 月の古書の収益は 18,080 円でした。【古本の売上を含む CLC からしだね書店の収益は、すべて、書店で働く障がい者の工賃になります】**献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思います。匿名ご希望の方は、お知らせください。**
ご寄贈いただいた皆様、ありがとうございました。

編集後記

◆１月１日、能登を震源にした大きな地震があり、とても驚きました。当法人から被災地に入った職員の現地レポートもお読みくだされば幸いです。「子どものための神のものがたり」の大頭眞一牧師も、１月２日、直ちに支援物資をもって、駆け付けられたそうです。言葉にならないほどの大切なものを失った痛みの中にある皆様お一人お一人に思いをはせ、心からお見舞い申し上げます。◆はからずも「読書感想本」では、「死」と「いのち」を扱った本を紹介しています。たまたま今、生きている私は、これからどんなふうに生きていけばよいのか、襟を正される思いがします。◆新しい連載が始まりました。「子どもと大人のためのこころの対話―信仰と哲学」凝り固まったステレオタイプのものの考え方から離れて、私たちが「生きること」、そして「生きること」を支える「信仰」について、やわらかな頭とこころで考えたいと思います。◆皆様のうえに、神様の平和がありますように。今年一年も、どうぞよろしくお願いいたします。【店長】

からしだね通信 2023 年 12 月号は発行され配布中!! こちらからもアクセス!! みてね☆

CLCからしだね書店便りのバックナンバーはこちらから
↓

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援Ａ・Ｂ型事業所からしだねワークス
からしだね書店＆カフェ・トライアングル
〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町 75 からしだね館
書店電話番号　075-574-1001　ＦＡＸ 075-574-0025
書店メール　clc@karashidane.or.jp